

令和 2 年 9 月 11 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K09152

研究課題名（和文）在宅で暮らす認知症の人の介護者支援のためのガイドライン開発

研究課題名（英文）Development of guidelines to support caregivers of people with dementia who live at home

研究代表者

馬場 みちえ (Baba, Michie)

福岡大学・医学部・准教授

研究者番号：60320248

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、認知症の人の家族介護者にインタビューをし、アセスメント項目抽出、文献検討を実施した。認知症初期の情報ニーズが高いことが明らかになった。「認知症の人の家族支援プログラム」を開催、専門的知識の提供、ピアカウンセリングの要素を加えた。プログラムに参加することで、認知症に関する情報・知識が増え、今後の生活の予測が可能になる、仲間とのつながりにより自己効力感が上昇した。家族支援プログラム参加前後で認知症初期の人の状態は、DBD13が悪化しており、Zarit8に変化なかったものの主観的介護負担感は軽減していた。ガイドライン(冊子)「認知症といわれた人の家族が読む本」を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知症初期の人の家族介護者は、情報ニーズが高かったことから、情報提供、ピアカウンセリングを基本とした「認知症の人の家族支援プログラム」を開催した。参加前後で本人のDBD13と家族介護者のZarit8は高くなっていったが、主観的介護負担感は低減していた。それらの結果をエビデンスとして認知症の人の家族介護者の視点に立ったガイドライン冊子を作成した。このガイドライン冊子は、認知症の人と家族介護者の自己選択、自己決定に向けた自立支援に向けて作成した。ケアマネージャー等の支援者にとって混乱している家族介護者の気持ちに近づくことができ、認知症の人と家族介護者への支援方法が拡大すると考える。

研究成果の概要（英文）：We interviewed families with experience of caring for people with dementia, selected assessment items, and conducted a literature review. We found that needs for information regarding early stage of dementia were high. We also held a “support program for families caring for people with dementia”, provided specialized information and peer counseling. By participating in the program, family caregivers had increased information and knowledge of dementia, developed future perspectives on their daily lives, and enhanced their self-efficacy through interaction with peers. Among caregivers of people with early-stage dementia, DBD-13 scores decreased, Zarit-8 scores remained unchanged, and the sense of subjective caregiving burden was reduced after the program. We prepared a pamphlet of the Guideline entitled: <A Guide for Families of People Diagnosed with Dementia.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：認知症 家族介護者 介護負担 介入研究

1. 研究開始当初の背景

認知症の人の家族介護者の負担は深刻な社会問題となっており、認知症の症状や行動障害はさまざまであり、混乱していることが指摘されている。介護者たる家族を支えるためのシステムが必要であるが、日本ではまだ整っていない。在宅で家族介護者の支援するためには、まず、家族介護者自身の状況を適切に把握することと、さらにそのうえで家族介護者に丁寧な支援をしていくことが必須であると考えた。在宅では、認知症の人の家族介護者の支援をするにあたって、介護保険制度下の介護支援専門員が支援者としての役割は大きい。支援者が、介護者を的確にアセスメントし、標準化したガイドラインで家族介護者支援をすることによって家族介護者のQOL向上をもたらすとともに現代の高齢社会を支えていくための緊喫の課題であると考えた。

2. 研究の目的

介護保険制度下で、認知症の人の家族介護者を支援している専門職が介護者支援が適切に行えるよう、介護者支援のための「ガイドライン」を開発することを目的とした。

3. 研究の方法

- (1) 認知症の人と家族介護者の介護負担に関するインタビューと文献検討
- (2) 「認知症の人の家族支援プログラム」の開催と同時にアンケート調査
- (3) 認知症初期の人の家族介護者の介護負担の実態の把握
- (4) 結果の知見を元にガイドライン冊子の作成。

4. 研究成果

(1) 認知症の人と家族介護者の介護負担に関するインタビューと文献検討

家族介護者に認知症の本人の状況と介護状況および専門職との関わりについて半構造化面接法にてフォーカスグループインタビュー調査を行い、内容分析を行った。カテゴリーは、【家族主体】【自分の健康(身体、精神)】【家族の社会経済的な憂い】【家族の認知症の知識と理解】【介護サポート体制】が共通したカテゴリーとして抽出された。文献検討では、**2000年**～**2016年**までに発表された医学中央雑誌、**CiNii**、海外文献では **Medline** によるデータベース検索とし、「認知症」「介護者」「**intervention**」のすべてを含む文献とした。さらに「グループ支援」に絞り込み、ハンドサーチも併せて行った。論文の種類は定量化された論文とした。条件にあてはまる文献は国内で**6**件、海外での文献**19**件で計**25**件であった。支援内容は、医師による情報提供や看護師による介護指導、ピアカウンセリングであるグループ内ディスカッションが行われていた。効果指標は、介護負担感、うつや不安、ストレス、コーピング、主観的健康感などであった。介護負担の軽減は、有酸素運動の介入、カウンセリングなどで効果があり、うつなどの心理にはカウンセリングや介護者同士の支持的介入であった。

(2) 「認知症の人の家族介護者のための教室」を開催と同時にアンケート調査

「認知症の人の家族支援プログラム」を認知症の人と家族の会愛知県支部尾之内方式を改編して開催した。対象は、福岡大学病院認知症疾患医療センター、認知症の人と家族の会福岡県支部の協力を得て、平成**29**年**10**月から**30**年**5**月まで**1**ヶ月に**1**回ずつ、計**6**回実施し、各回とも**3**時間実施した。参加者は、認知症初期(要介護**2**まで)の人の家族**23**名(**65.3±8.8**歳、男**7**名女性**16**名)であった。内容は毎回交流会**1**時間と講義・質問およびディスカッション形式とした。「認知症の基礎知識」(医師)、「ケアマネージャーとの付き合い」(ケアマネージャー)、「認知症の人の生活の中のリハビリテーション」(理学療法士)、「介護者の気持ちをみつめる」(福祉制度と社会資源)、「かかりつけ医師との付き合い方」(開業医)であった。なお、上記教室を**3**年間継続した。教室の毎回

の出席率は **90%**以上であった。

次に、教室コンテンツニーズに関して、質問内容分析を行った。質問内容を類似性、同質性で分類し、カテゴリー< >、サブカテゴリー[]、コード()を抽出した。結果としては、認知症初期の人の主たる家族介護者の質問内容は、<認知症症状><介護サービス><受診><介護者自身の思い>の **4**つのカテゴリーが抽出された。<認知症症状>は、[記憶力低下][判断力低下][幻視][妄想][興味低下]など認知症の症状とともに影響している[食事][排泄][徘徊][入浴]**16**のサブカテゴリー、**102**コードがあげられた。<介護サービス>は、[ディサービスにいきたがらない][ケアマネの業務][介護保険内容]など5サブカテゴリー、**39**のコードがあげられ、<受診>は、[受診拒否][医師よりの服薬中止][薬の話][薬以外の話]など7サブカテゴリー、**28**のコードがあげられた。<介護者自身の思い>では、[本人の自己中心への怒り][行動制御不能への怒り][介護者自身の健康不安]があげられ、それに対して[罪悪感][受容困難][葛藤]が生じていた。さらに介護者家族として [自分で介護したい][他人に頼めない][他人の偏見に怒り]など、同じ介護者立場の人との共有を背景とした質問があり、**10**サブカテゴリー、**57**コードがあげられた。

最後に支援プログラム介入前後でアンケート調査による評価を行った。介入前後の家族介護者の自己効力感 (**GSES**) と介護負担 (**Zarit 8**)、本人の認知症アセスメント **DBD13**、**DASC21**、岡林の対処方略尺度、うつ尺度として **CES-D**、主観的介護負担を使用した。なお、解析は、**SPSS24.0**を用い、**2test**、**paired t-test**で分析した。有意水準を **5%**とした。

)自己効力感は、介入前では **21.6**点から介入後 **22.8**点 (**n=21**)と上昇していた (**P<0.05**)。また介護負担を測定する **Zarit 8**では、介入前 **19.6**点、介入後 **20.3**点と有意な差はみられなかった。また、参加者の言葉として「認知症の知識がかなり増えた」「いろいろな社会資源があることがわかった」などの情報獲得とともに、「仲間と話せてよかった」「また頑張れる」など相互交流および思いの共有ができていた。

認知症初期の人の家族介護者のための支援プログラムに参加することで、直接介護負担を減らさないものの、認知症の知識や情報が増えること、今後の生活と介護に対して予測が可能になること、仲間の存在により自己効力感が上昇したなどが考えられた。

)本人の認知症アセスメント **DBD13**、**DASC21**、客観的介護負担尺度 (**Zarit 8**、うつ尺度 **CES-D**、主観的介護負担)の分析

本人の認知症状態は、介入前後で **DBD13**は、**28.9±7.4**から **30.6±1.8(P<0.05)**であった。中でも「夜中に起きる」(**P<0.01**)、「昼夜逆転」、「やたら歩き回る」が高い傾向であった。**DASC**は **48.9±9.4**から **49.1±10.7**、**Zarit83.1±1.0**から **3.2±1.0**、**CES-D17.2±5.0**から **16.9±5.7**といずれも変化はなかった。主観的介護負担感では、**3.0±0.7**から **2.8±0.6 (P<0.05)**と低下していた。

6か月間の家族支援教室介入前後で、認知症初期の人の状態は、生活障害の変化はなかったものの、行動症状が悪化していた。客観的介護負担は変化なかったが、主観的介護負担が軽減していた。家族支援教室で、認知症初期から今後の見通しについて専門家から情報を得られたこと、教室に来ることで本人と離れたこと、共感できる仲間と話せたことが介護負担に影響したのではないかと考えた。

)岡林の対処方略尺度 **16**項目

岡林の対処方略尺度による **16**項目全体の平均が介入前で **2.8±0.5**点、介入後 **3.2±0.5**点 (**P<0.001**)で有意な差がみられた。今回の結果では、**16**項目のうち特に公的支援追求で

ある「在宅サービスを積極的に利用する」が介入前 2.1 ± 1.27 点から介入後 3.0 ± 0.8 点 ($P < 0.05$) と高くなっていた。他に介護におけるペース配分である「無理しないように介護している」が介入前 2.1 ± 1.27 点、介入後 3.0 ± 0.8 点 ($P = 0.055$) と傾向がみられた。なお、私的支援追求および介護役割の積極的受容には有意な差はみられなかった。

認知症初期段階の高齢者を介護する家族のために集団方式により支援プログラムで6か月間介入した結果、対処方略は介入後ほぼすべてで高くなっていた。対象者は、認知症の初期段階において介護に対して積極的に受容して行動するというより、まず認知症や介護サービスの知識を増やすことと、無理しない介護の方法を獲得しようとしていることが明らかになった。

(3) 認知症初期の人の家族介護者の介護負担の実態を把握する

2019年度までに教室3クールを実施し、その全データで介入前データを使用した。認知症初期に絞って主介護者側の要因別の介護負担度(Zarit8)、介護負担感と介護に関する情報ニーズを分析した。なお、解析は、SPSS24.0を用い、2test、paired t-test、一元配置分散分析で分析した。有意水準を5%とした。

認知症初期の人の主介護者の介護負担度(Zarit8)の平均点数は 11.9 ± 7.5 点であり、DBD点数は、 9.31 ± 7.19 点であった。表1にも示すように、介護認定あり、介護サービス利用ありが介護負担度は高く、DBD点数も高くなればなるほど介護負担度は有意に高くなっていた。また主介護者の健康状態、精神状態、主観的介護負担感、人間関係においても介護負担度は有意に高くなっていた ($p < 0.05$)。

次に、認知症初期の人の家族介護者の主観的介護負担感と情報ニーズについて分析した。それによる家族介護者の主観的介護負担感がある人は、「介護の中で感じる孤独感を和らげたい」「自分の気持ちを分かってもらえたと実感したい」「他の介護者の話を聞くことで元気をもらいたい」と思っている人が有意に高かった ($P < 0.05$)。

これらのことから、認知症初期の人の家族介護者は、本人の症状や行動障害を示すDBD得点が高いほど介護負担度は高く、主介護者の健康状態も大きくかかわっていることが明らかになった。また主家族介護者の主観的介護負担感がある人は情報ニーズが高いことが明らかになった。今後、必要な情報をどのように取得できるのか、多くの情報から自分自身がどのように選択し、自己決定していくかについての支援を検討していく必要があると考えられた。

(4) ガイドライン冊子を作成

研究結果から、認知症診断直後の認知症初期の人と家族介護者が最も混乱していることに注目し、家族介護者が読む冊子を作成した。認知症初期には多彩な症状が出現し、家族介護者は多くの情報から自分の情報を選択することは難しいが、まず全体像をイメージできることが重要であると考えた。また、今後の介護の道筋にあたって、調査結果や先輩の声から得られた「認知症本人もそして自分も大事にする」という自己決定、自己選択するという自立支援への考え方を中核にした。また事例を多くしたことで介護にあたって一人ではなく、仲間がいるというピアカウンセリング要素も含めた。この冊子の特徴は、認知症の人の家族介護者の先輩や現在介護中の方の声から作成されたものであり、認知症の家族に対する考え方や対処方法、介護の工夫もリアリティに富んで整理されていることである。ケアマネージャー等の支援者にとって混乱している家族介護者の気持ちに近づくことができ、認知症の人と家族介護者への支援方法が拡大すると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 馬場 みちえ	4. 巻 19
2. 論文標題 これからの高齢者の介護と健康支援	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 75-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 馬場みちえ	4. 巻 19
2. 論文標題 在宅で暮らす認知症の人の家族介護支援に向けた動向	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 59-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 馬場みちえ、尾之内直美	4. 巻 19
2. 論文標題 認知症初期の人の家族介護者への支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 69-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 馬場みちえ、岩本知恵美、大倉美鶴、西内恭子.
2. 発表標題 認知症初期の人の家族介護者のための支援プログラムによる介護負担と自己効力感の変化
3. 学会等名 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩本知恵美、馬場みちえ 山本八千代
2. 発表標題 認知症初期の人の家族のための教室プログラムのコンテンツニーズの検討 質問からの分析
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 馬場みちえ、岩本知恵美、山本八千代.
2. 発表標題 認知症初期段階の高齢者を介護する家族の支援プログラム教室介入による対処方略の検討.
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Michie Baba, Chiemi Iwamoto, Mitsuru Okura, Yachiyo Yamamoto, et al.
2. 発表標題 Effectiveness of a Support Program to Reduce Caregiving Burdens on Families of Patients with Early-stage Dementia
3. 学会等名 Eafons (Singapore) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 馬場みちえ、尾之内直美、岩本知恵美、柳竜一
2. 発表標題 認知症初期の人の家族のための家族支援プログラムの評価
3. 学会等名 日本認知症ケア学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 M i c h i e B a b a , Yachiyo Yamamoto, Mitsuru Ohkura, Tomoko Oshiro, Harumi Ayukawa, Yoyoi Hara
2. 発表標題 A Literature Review on the Effects of Different Intervention Methods to Support Family Care-givers for Patients with Dementia
3. 学会等名 21th E a f o n s (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Michie Baba, Tomoko Oshiro, Yachiyo Yamamoto, Kyoko Nishiuchi
2. 発表標題 Clarification of Family Care-givers' Needs as a Basis
3. 学会等名 20thEafons (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Michie Baba, Chiemi Iwamoto, Tomoko Oshiro
2. 発表標題 Confusion and Difficulties Faced by Families Caring for the Elderly with Dementia at Home
3. 学会等名 The 3 r d International Society of Caring and Peace Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 行武果織、帖地節子、千葉秀美、内田和加子、前田睦子、栗巢京、木村小百合、行武亮、眞島大輔、溝田佐知子、野奈留美、瀬戸裕司、馬場みちえ
2. 発表標題 認知症高齢者に対する効果的なチームアプローチについて～大野城市認知症初期集中支援チームを実施して～
3. 学会等名 福岡県公衆衛生学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 行武香織、帖地節子、馬場みちえ
2. 発表標題 大野城市認知症初期集中支援チームにおけるアプローチの評価
3. 学会等名 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 馬場 みちえ、山本 八千代、牧 香里、上野 珠未
2. 発表標題 認知症初期の人の家族介護者支援に向けた介護負担とニーズに関する検討 第1報 家族介護者における介護負担の関連要因
3. 学会等名 日本健康支援学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本 八千代、馬場 みちえ、牧 香里、上野 珠未
2. 発表標題 認知症初期の人の家族介護者支援に向けた介護負担とニーズに関する検討第2報 家族からみた介護者支援のニーズ
3. 学会等名 日本健康支援学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	山本 八千代 (Yachiyo Yamamoto) (10295149)	北海道科学大学・保健医療学部・教授 (30108)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	坪井 義夫 (Tsuboi Yoshio) (90291822)	福岡大学・医学部・教授 (37111)	
研究分担者	人見 裕江 (Hitomi Hiroe) (30259593)	山陽学園大学・看護学部・教授 (35310)	
研究分担者	大城 知子 (Oshiro Tomoko) (50461538)	福岡看護大学・看護学部・准教授 (37129)	
研究分担者	鮎川 春美 (Ayukawa Harumi) (60633005)	聖マリア学院大学・看護学部・講師 (37125)	2019年度大学退職のために削除
研究分担者	大倉 美鶴 (Ohkura Mitsuru) (70364172)	日本赤十字北海道看護大学・看護学部・教授 (30120)	
研究分担者	緒方 久美子 (Ogata Kumiko) (00309981)	福岡大学・医学部・准教授 (37111)	